歴研おかやま
okayama history research society
第　8　号
2013年11月20日

会員募集中
年会費　二千円
十月以降入会　千円

歴史関連団体調査　冊子完成

引続き二次調査に協力を

これまで、岡山県下には歴史に関わる多くの団体が活動され、実績をあげておられます。

当会では昨年三月からそれらの調査を行い、六二団体の協力を得て冊子にまとめました。同時に、当会のホームページに公開しました。

この結果、歴史関連団体の実態把握が図かれ、団体相互の情報交換・ネットワークの拡大や強いては団体の会員募集につながります。

また、団体や行政が開催する講演会、イベントの案内・広報に活用できます。歴史ファンの裾野が広がり、埋もれた歴史や文化の再発見等が可能になります。

さらに、全県下を網羅し、完成度の高いものにするため、引き続き、調査（第2次）を行います。未登録団体の協力をお願いします。

▶　完成した冊子

全国大会　岡山から十四名参加

肥後熊本大会

全国歴史研究会全国大会が十月十八日～二十日、肥後熊本で開催された。全国から二百五十名、岡山から十四名が参加。東京都に次いでの参加で、おかやま観光コンベンション協会の法被で岡山をアピールした。

熊本の見学は水前寺成趣園（通称、水前寺公園）、泰勝寺、第五高跡、熊本城、本妙寺、霊巌洞（宮本武蔵が五輪の書をしたためた処）、田原坂（西南戦争の激戦跡）、装飾古墳館、八千代座、最後の訪問地、鞠智城では、日頃公開していない八角形鼓楼に入館できるなど、歴史遺産を案内された。「ゆっくり熊本に来てみたい」との声が多くあがった。

来年は北陸、福井です。

▲祝賀会で野島透氏が挨拶
“山田方谷をＮＨＫ大河ドラマに”

歴研展望

今年度は、美作国建国一三〇〇年に因んだ定期総会に始まり、六月には津山市・美作市方面の探訪会、そして「歴研サロン」「ブックサロン龍紅堂」の開設と続きました。

特筆すべきことは、九月に、懸案の県内の歴史関連団体の調査結果を「岡山県歴史関連団体一覧」（第一次）として刊行できたことです。

完成品に近づけるため県下全市町村教育委員会等のご理解もいただいて調査（第二次）を継続しています。

十月には備後方面の探訪会で吉備国のエリア一巡を実現できました。

また、全国大会の肥後熊本大会には昨年に続き二桁の参加者で、当会の意気込みを示しました。

十一月には初めてのグループ活動である「五島列島ドンザの会」の成果報告書が作成されました。

来年度に向けては、大河ドラマの主人公、黒田官兵衛に焦点を当てた取り組みを、と準備中です。

岡山歴研の更なる充実によろしく願い申し上げます。

（会長　天野勝昭）

岡山は超一級甲冑の宝庫

元吉備国際大学教授　臼井洋輔

歴史を全体的に理解する場合、文化的盛衰を知るということは避けては通れない。そしてそこから時代を大きく左右する要素が導き出される。時代を取り巻く自然環境並びに社会環境の変化と、切り拓こうとする情熱、美意識、そして技術に対する姿勢が時代を高みに上げたり、見せかけ的に形骸化させたりする。文化史を形成する根幹はそれに尽きるのではないか。

日本の文化史を彩るモノの中で、甲冑ほど時代区分と合致して様式がガラリと変わるモノはない。甲冑は武士にとって、生命と誇りを守るための唯一最大のものであるだけに、その時代のあらゆる工芸の最高の技術を駆使して作られている。そのために、皮革、染織、組紐、彫金、鍍金、鍛工、穿孔、印刷、漆工等、その時代の技術レベル、その時代に、何を考え、どの様な美意識を持っていたのかが非常に良く分かるのである。だから、歴史の時代的変遷のダイナミズムを知りたければ日本甲冑史を知るのが良い。各時代の技術レベルと美意識を知るのに、甲冑以上のものはない。その甲冑が登場する最初期から江戸時代後期まで超一級品が完全に揃っている岡山は本当に希な県なのである。そのことを知って欲しい。岡山のそれらの甲冑を見れば、誰もが日本の甲冑の本質を掴む権威者になれること間違いなしである。甲冑ほど時代ごとに形式がすっかり変わるものも珍しい。時代がモノを作るという意味からも、究極的にその「時代」を知るのに、これほど的確なものはない。

国宝赤韋威鎧（写真提供岡山県立博物館）

1　弥生時代　木製鎧の登場

狩猟採集社会から稲作農耕への移行で遥かに安定したが、敵が動物から隣人へと変化したため、武器、武具の登場という時代を迎えた。その頃の鎧も岡山には存在している。岡山大学鹿田遺跡や市内南方遺跡等から削り出し短甲や西安の兵馬俑の鎧に似たカルタ片を綴ったものまで揃っている。（岡山大学考古資料展示室、岡山市埋蔵文化財センター蔵）

2　古墳時代　鉄製短甲

鉄生産の拡大によって、その用途も技術に支えられて拡がっていった。木製短甲から鉄製短甲への転換が起こった。鉄製短甲は県下に30領ほどある。（随庵古墳のものは総社市埋蔵文化財学習の館蔵）

3　古墳時代後期　鉄製挂甲　八幡大塚古墳出土

大陸から乗馬風習の伝来と共に、上下の激しい屈伸運動対応構造の鉄製挂甲がわが国に初めて登場した。当時の革や絹織物の紐や布なども付着している。（文化庁所蔵　岡山県立博物館保管）また赤磐市山陽町正崎2号墳出土の短甲（山陽郷土資料館蔵）は、挂甲への過渡期の様相をもっている。

4　平安時代末期　国宝 赤韋威鎧

わが国に初めて武士が表舞台に登場した時、武士道に則った力強くて美しい、日本独特の大鎧が生まれた。源平時代には赤韋で威した大鎧が主流であったが、残存しているのはこれ1領のみ。日本の甲冑の中で最も豪壮で、随所に武士道の美意識を非常によく反映しており、しかも伝来もはっきりし、後世の修理痕跡も殆ど無く、当時のままの様子を知ることが出来、わが国でこの右に出るものは無い。（岡山県立博物館蔵）

重文色々威甲冑（写真提供岡山県立博物館）

5　鎌倉時代～南北朝時代　重文 色々威甲冑

これほど完璧に修復され、その上、修理時に各部位の構造などを克明に

記録している例もまた希有である（寛政5年　1793）。そのために装着部品も完全に揃っていて、大鎧の全容を知るにはまたとない好資料であると同時に、江戸時代の岡山の文化財修復にかける崇高な思いさえ知ることが出来る。（瀬戸内市邑久町　豊原北島神社蔵　岡山県立博物館寄託）

6　南北朝時代
重文 紺糸威胴丸

この頃騎馬戦にも組み討ち、徒歩戦にも向いたより動きやすい甲冑が生まれた。大鎧から腹巻への過渡期の鎧である。胴丸では、これまた第一級の資料である。（林原美術館蔵）

7　室町時代
重文 藍革威肩白腹巻

この時代になると戦闘が激しくなり、戦闘様式、戦法も多様化し、雑兵に至るまで全員に着用させるためには短期多量生産、軽量化が図られ、超簡便な腹巻が生まれた。そうした中でも、作風において他を圧倒している。足利尊氏奉納と伝えられている。（瀬戸内市　遍明院蔵）

8　桃山時代～江戸初期
県文 赤黒片身替具足

戦国時代末期になると、鉄砲、キリスト教、世界地図、巨大な外洋船を擁した西洋文化と初めて直面した。美意識や世界観への影響はもちろん、鉄砲への対応を余儀なくされた。そういう中で萎縮することなく日本のルネッサンスとして、当時の具足は東西融合の産物のように生まれた。（高梁市歴史美術館蔵）

9　江戸時代後期
立湧文二枚胴具足

戦の無い江戸時代になると、求める側の意思に傾斜し、非実用的なほど装飾的であったり、果ては女性用の甲冑まで現われた。これは池田治政夫人（勝子）の鎧である。泰平の世では実用を離れて技巧に傾斜するのは世の常である。ただこの鎧には、鎧紐にあり得ないような手間暇かけた技術が用いられている。是非見て確かめて欲しい。（林原美術館蔵）

これら9例を見るだけで、あなたは日本の文化史理解の鍵を手に入れることができるだろう。

美作聖人「森本慶三」

津山歴史人物研究会 代表　近藤泰宏（会員）

森本慶三（八九歳）

津山城跡は美作国第一級の文化遺産である。その必見の施設は南入口にある津山基督教図書館（現・森本慶三記念館）と津山科学教育博物館（つやま自然のふしぎ館）である。

その創設者、森本慶三は明治八年、津山に生まれた。中国銀行役員等を経て、戦後、津山基督教学園を創立して校長となり、近江聖人、中江藤樹を範とし、郷土の人材育成と文化向上に力を注いだ。

美作聖人とは、博物館副館長、生駒義博博士の彼への献名による。

森本は二十三歳の時「日本の文明が単に皮相的物質的に止まり、精神文明の遅々と進まざるは慨すべきの至りなり」と社会教育の不足を訴えた。彼はさらに人間の罪と解脱を考究し、内村鑑三著『求安録』に光明を見出し、内村門下となる。

内村が、当時の進取の気性に富む青年層や、日本の思想、宗教、教育界に与えた影響は絶大であった。が、真によくその思想を信受した人は少ない。内村生誕一五〇年記念出版の『内村鑑三』（藤原書店）の編者、新保祐司は、内村精神には現代日本再生の力があると言う。ならば、今、旧図書館二階の講堂が歴史民俗館となり、森本・内村関連の展示を置く意義は大きい。森本慶三こそ、数少ない内村精神の継承者のひとりであるからだ。内村、賀川豊彦、山室武甫、矢内原忠雄等多数の賢人の声がしみこんだ講堂は、凛とした霊気漂う県下有数のパワースポットでもある。

明治四十四年秋、内村は初めて津山に森本を訪ねた。翌年も再訪し、三日間聖書講演会を行った。が、その翌年、森本を試練が襲う。妻、梅代が三十二歳で召天した。内村から慰励の来信。曰く、「悲痛の撲滅剤として最も有力なるは〝他人の為にする活動〟に有之候、君がこの際、この薬を多量に服用せらるることを御勧め申候」。

思案四年。森本は図書館建設を決意し、内村に相談の書信を送付した。内村は見解を返信―（大正六年一月）。内村はこの夏、罪の解決と世界平和の具現は基督再臨に帰すと確信し、十月から大正八年前半まで各地で再臨講演会に投入することになる。なおこの年、内村の尽力で森本は再婚。師弟一体。森本は内村の助言を得て、基督教伝道を目的として図書館建設計画を発進させた。胸中にはさらに博物館の構想も抱きつつ。

大正七年十月十一日（金）～十三日（日）、森本が有志と主催し、岡山県議会議事堂で岡山聖書講演会を開催した。三日とも前講をホーリネス教会の中田重治が話し、後講の内村は「新約聖書の主旨は〝主再び来り給わん〟である。生身の人間として、今、来たり給いつつある。基督再臨は迷信にあらず」と予言した。

この時期、世界的に再臨運動が活発であった。中でも韓国では、天道教は鄭鑑録なる預言書、基督教は再臨説、仏教は弥勒信仰を根拠として韓国に救世主が来るとの信仰が盛んになり、この流れは一九一九年三月一日、韓国全土に広がる三・一独立運動に合流する。注目すべきは、その仕掛人が在日韓国人留学生であり、彼らは先行して二月八日に東京で「独立宣言式」を行ない、さらに約六百名中、六十三名が内村門下だったことである。内村の視点は〝仏儒伝来〟の経路を念頭に「幸福なる朝鮮国…今や再び東洋福音の中心となり、その輝きを四方に放たん…」というもので、当時の韓国を二千年前にイエスを生んだイスラエルと重ねた。日本はローマである。彼は、「日本の近代の最も根源的な批判者（新保氏の言）」であった。

やがて関東大震災（大正十二年）を経て、昭和元年一月三日（日）雪の日、図書館開館式に内村は津山へ来た。「法然房の福音的仏教を産出せし作州の地…」と祝辞。森本の活動は、震災からの物質的復興のみ急ぐ日本の中にあって、精神復興の拠点を創るものであった。

その翌年、内村門下の金教臣が東京師範学校を卒業直後、森本を訪ね、数ヶ月逗留。共に図書館でヘブル語による聖書研究を行った。森本も内村同様、帰国後朝鮮無教会を名のり活動するこの弟分を応援した。

昭和二十一年、第二次世界大戦の艱難を超えると、森本は、津山洋学復活を期す水田昌二郎の日本蘭学会を応援する。その「蘭学祭」は十一月、津山基督教図書館で開催された。敗戦から日本再建へ立ち上がる力を各方面に与えた。二十五年高校設立。三十八年博物館は完成した。実務は子息、謙三が担当。十年の年月の裏に、大賀一郎、川村多実二ら多数の賢者の協力があった。展示総数二万二千点。世界レベルの化石、貝、昆虫、野鳥、野生動物等が並ぶ。要所に置いた聖句が見る人を大自然と神の前に謙虚にさせる。

翌年（昭和三十九年）夏、森本は大山の再臨待望特別集会で講演。十二月五日、召天。八十九歳。

森本家の先祖は源満仲の長子の後孫、摂津多田源氏。満仲は畿内で秦氏を姻戚とし、武士団を形成する。

美作は秦氏の基盤。津山森本家の初祖の美作移住（一五五〇年）はこの故か。

かつて秦氏は総力で弥勒下生に備えて平安京建設に尽力した。天はそのバトンの一つを森本慶三に託したのである。

▲旧基督教図書館（現森本慶三記念館）

※提供された写真を使用しています。館を見やすくするため環境を画像修正してあります。

団体紹介

賀陽歴史顕彰保存会

顧問　芝村哲三（当会顧問）

昭和35年、芝村家仏壇より寛政年代の廻国霊場巡拝綴が発見され、これを基に、県立博物館の協力を得て、備中から青森県、恐山に至る全行程を同行の士と数日間巡礼した。

それが端緒となり、公民館事業と発展、毎月議題を設け、質疑応答の勉強会を開催したのが賀陽歴史顕彰保存会の始まりである。

取組んだ課題を順次列記すると

① 妹尾天然画伯の全国調査と顕彰碑の設立
② 大月関平伝の関係地の調査
③ 玄賓僧頭の説明掲示板の設置
④ 矢倉山城を守る会結成と案内看板設置
⑤ 天台宗と日蓮宗の合同イベントの実施
⑥ 備中白色五輪塔、埋設事件の検証、講演
⑦ 貞徳寺、寂室元光及び松嶺道秀の研究
⑧ 真庭市四畝城址関連調査、説明板設置
⑨ 栄西禅師の竹乃荘生誕説の提唱及懇談会
⑩ 大村遺跡より出土の五輪塔群の集積配置
⑪ 山田方谷の西村在宅武士制の看板設置
⑫ 大村寺、薬師霊場の説明
⑬ 幕末、天誅組の研究
⑭ 老中、板倉勝静の研究
⑮ 東京国文学研究資料館の郷土史調査発表
⑯ 備中兵乱、犠牲者の供養及び看板設置
⑰ 墓石拓本の勉強
⑱ 新撰組の研究

列記した以外に幾多の課題も調査、研究した。が、現在、中断中である。

◀看板（平成十年設置）と芝村哲三氏

先史古代研究会

会長　丸谷憲二（当会運営委員）

「先史古代研究会は何を研究しているのですか」と質問されます。先史古代研究会のHPを開いて下さい。「熊山遺跡とは何か」を特集し、熊山遺跡に関する全説を紹介しています。熊山遺跡先史古代説です。機関誌『きび考』の8号が10月に発行されました。機関誌名『きび考』とあるように、先史古代研究会は吉備国を研究しています。吉備国の先史古代を中心に日本国、そして、世界へと研究は拡がっています。先史時代とは「人類が出現し文字を発明し歴史に記録を残すようになるまで」です。人類史の99％を占める時代です。歴史は記録されることで生まれます。研究は人類学・神話学など多岐にわたります。

具体的な研究としては「吉備国への渡来人の故郷は何処か」があります。もちろん、先史古代研究会の活動内容には、吉備国全般の研究も含まれております。

活動内容としては

1 定期例会を5回／年、研究発表と情報交換
2 古代吉備探訪会を1回／年
「高嶋伝承地を歩く会」を開催中
3 機関誌『きび考』の発行、2回／年
4 ホームページ公開中

会の基本は先ず顔を合わせること。

そしてフリートーキングです。

平成22年10月に日本先史古代研究会として発足し、平成25年4月に先史古代研究会と名称を変更しました。

▶福留正治氏、例会にて「たたらと現代製鉄」講演

第七回探訪会

備後路（福山市）探訪

十月二十七日（日）秋晴れの下、四十二名がバスで備後の遺跡・国宝・社寺を訪ねた。最初に備後国分寺跡。次に二子塚古墳では、福山市教委学芸員の説明を聞き、古墳に入る。しんいち歴史民俗博物館では、二子塚古墳から出土した珍しい金属製の双龍冠頭柄頭等を見学。備後吉備津神社は、権禰宜の尾多賀氏の案内で参拝し、美味しい弁当を食べながら詳しい説明を聞く。広島県立歴史博物館では、往時の草戸千軒町の町並みが実物大のジオラマで一部再現されて興味深かった。最後、国宝の建物二棟ある明王院では、ガイドの三谷氏と片山住職の話を聞く。帰りのバスで「歴研ならではの探訪会」との声しきり！。

備後吉備津神社の階段で記念撮影

今後の予定

- 11/26（火）
  第4回歴研サロン
- 1/18（土）
  第7回探訪会
  吉備の中山ウオーク
  （雨天順延）
- 2/25（火）
  第5回歴研サロン

お知らせ　第八回探訪会

吉備の中山をウオーク

吉備の中山を守る会の協力

日時：1月18日（土）
（雨天の場合順延1/19）
集合：岡山市立中山小学校
9時集合
案内：吉備の中山を守る会
野崎豊（顧問）
参加費：500円
持参：弁当・お茶
探訪
- 吉備津彦神社
- 八大龍王・（天柱岩）
- 八畳岩・鏡岩
- 中山茶臼山古墳（御陵）

昼食後、帰りコースを選択
- Aコース（吉備津神社）
- Bコース（福田海）
- Cコース（石舟古墳）

ご報告 お知らせ

歴研サロン

第四回 11月26日
第五回 2月25日

第二回「歴研サロン」が七月二三日開催され、関心が高い「後南朝」がテーマのため参加者は六四名。会場が一杯となった。山崎泰二氏・流王農氏・野崎豊氏・雪吉政子氏・江見則勝氏の五名が発表した。

第三回「歴研サロン」が九月二六日開催され、三二名が参加。「剣聖　大月関平伝」をテーマに芝村哲三氏が講演。芝村哲三氏は高齢（八八歳）にもかかわらず情熱的に話された。芝村哲三氏には著書が数冊ある。

第四回「歴研サロン」（先着六十名）
開催　十一月二六日（火）1時半～
場所　ゆうあいセンター2階
講師　中山亘氏（会員）
「今何故山田方谷か―経世思想と業績」

第五回「歴研サロン」（先着六十名）
開催　二月二五日（火）1時半～
場所　ゆうあいセンター2階
講師　能勢協氏
テーマ「能勢道仙とその子息たち」（仮題）
講師　能勢初枝氏（会員）
テーマ「吉備真備について」
※　参加希望は、事前に予約が必要です

●受賞●　当会顧問で総社市教育委員会前委員長　清水男氏（六一歳・総社商工会議所会頭）は、地方教育行政功労者として、十月に文部科学大臣表彰を受賞されました。

【訂正】　前号の「叙勲」紹介で芝村哲三氏の瑞宝双光章は間違いで、旭日双光章でした。お詫びし、訂正いたします。

■編集後記■　今年は美作建国一三〇〇年。美作聖人と呼ばれる「森本慶三」について津山在住の近藤泰宏さんに紹介していただきました。

又、江戸後期、津山藩お抱えの具足師・明珍宗周が製作し、幕府よりオランダへ贈られた二領の鎧が同国のライデン民族学博物館にあることが昨年末判明した。そこで、「岡山は超一級甲冑の宝庫」と題して臼井洋輔氏に寄稿を頂きました。

念願の県内の歴史関連団体の調査がやっと纏まり、第一次調査として冊子にできました。完成品をめざし、引き続き調査を継続します。ご協力をお願いいたします。

尚、調査票等資料請求・問合せは、事務局までお願いします。（楠）

発行　岡山歴史研究会
会長　天野勝昭
編集長　楠敏明
事務局　〒701―1332
岡山市北区平山844―86山本方
電話　086・287・6226